

酒井忠夫先生を送る

大川 富士夫

文学博士酒井忠夫先生は、本年三月二十五日、めでたく古稀の寿を迎えられると同時に、このたび定年退職されることになった。昭和五十一年四月、山崎宏教授の後任として本学にお迎えしたときは、丁度、大学院史学専攻に博士後期課程の増設を準備中であり、御着任早々にもかゝわらず、文部省等との交渉に当られるなど格別の御協力を頂いた。幸い、順調に事が運びその認可を得るに至ったが、史学専攻主任桃裕行教授を先頭に、酒井先生をはじめとする史学科の全教員が熱情を傾け、一致協力して、積年の宿願であった博士課程増設のために努力したことが、つい昨日のように想起される。それだけに、その中核であった桃先生を昨年三月お送りし、今年また酒井先生が退職されることになったのは感慨無量、まことに残念でならない。

先生は、昭和四年の春、故郷の福井中学から筈を負うて上京し、東京高等師範学校文科第四部・東京文理科大学に進んで東洋史学を専攻された。在学中から中国の民衆の宗教に興味をもたれたが、卒業後、東亜研究所の研究員となり、中国実社会の実態調査に従ううちに一層、民衆社会への関心を深められたと仄聞している。

敗戦後、中国から帰国された先生は、母校やその後身である東京教育大学で教鞭をとられ、ことに筑波大学の創設には、文字通り身命を賭して尽力された。その間、明清代の民衆史に関する研究論文を次々と発表され、またたく間

にこの分野での独歩の地位を築かれるのである。昭和三十六年に公刊された学位論文『中国善書の研究』は、従来未開拓のまゝ残されていた民衆道教の思想史的社会史的研究として学界に不朽の金字塔をうちたてられたもので、今日もなおひとときわ高い声価を得ている。中国の秘密結社・民衆道教研究の大家としての先生の令名は、そのところからすでに世界的に聞こえるようになったが、その後の御研究にも、先生が現地で体験された民衆の生活への深い理解と中国社会に対する鋭い洞察力にうらうちされたものが多い。

先生の中国民衆社会史研究が体験をふまえて深化された御考察であることから知られるように、先生の学風は、つねに生の現実社会との対決の中で培われた問題意識を研究面に活用されているように見受けられる。その意味では、先生は単なる象牙の塔の学究ではない。東京教育大学・筑波大学において大学行政に心血を注がれ、文部省関係の各種の専門委員を歴任して精力的に活躍され、また日本歴史学協会委員長・総合歴史教育研究所長・東方文化協会理事長に就任し、それぞれに顕著な足跡を残されているのも、すべて先生御自身の研究と深く結びついているように思われる。

筑波大学を停年退官された先生は、シンガポールの南洋大学の客員教授を経て、本学の専任教授となられたが、本学御在任中の六年間の御活動も多彩である。昭和五十二年には日本道教学会会長に就任され、学会運営に敏腕をふるわれる一方、スイス・ソウル等で開催された国際会議に出席して研究発表を行ない、昭和五十四年にはシンガポール・マレーシアの華人社会の学術調査団を組織し、国際的な学術交流に貢献された。この間、学術審議会専門委員、日本歴史学協会委員としての御活躍も変ることなく、立正大学史学研究室を中心に、連年のように文部省科学研究費の交付を受けて研究プロジェクト・チームを組織され、歴史学界における立正大学の声価を一段と高められた。ことに本学の研究活動と研究設備の充実という面での先生の御功績は甚大であり、特筆して御礼申し上げたい。専任教授

としての業務のみならず、このような国内外の活動をされていても、先生御自身の研究成果は、末尾に掲げた一覧表から伺えるように、十八篇もの論考としてまとめられているのである。御多忙であればあるほどいよいよ燃えさかる先生の研究意欲の旺盛さ、活力の大きさには驚嘆させられる思いである。

先生のお人柄については、頑固で、一旦つむじをまげられると容易なことではなならないというのが定評のあるところである。たしかに、激怒されるときは実にすさまじい。がしかし嵐がおさるとまことにサッパリして少しのわだかまりも残されないのは見事である。先生はよく「こらえ性がないから、つい思ったことを口にしてしまう」と述懐されるが、正・邪を峻別し、至誠をもって事に当ろうとする先生の御信条が、容易な妥協を許さないのもあろう。

剛直でしかも実に勘のするどい学者である先生はまた心温かな人情家でもある。僅か六年間の、しかも極めて御繁忙な御在任期間であったが、先生は心底から学生を可愛がり、心配し、面倒を見られた。ゼミ受講の学生は全員、休日に自宅に呼んで指導され、貴重本でも惜し気なく学生に貸与された。御自身の担当でないゼミの合宿にも時間をやりくりして参加された。真面目な学生の頼みには、学部・学科の別なく労をいとわずに助力されるという風であった。厳父のようなきびしさと慈愛あふれる教育者の二面が先生の魅力といえよう。

先生は明治四十五年のお生まれである。先生の御退職を最後に、明治生まれの教授は在職されないことになる。しかし、先生の学問とお人柄にみられる明治人の逞しい気骨とすがすがしい清潔感だけは失ないたくないものである。幸い、先生は古稀というおとしには思えないほど御壮健で、四月からも講師として御出講頂ける。今後とも、益々御多忙をおいといなく、学界・教育界を誘掖せられ、われわれ後進の者をお導き下さるよう切にお願いする次第である。

主要著述目録

〔著書〕

昭和一六年一〇月
 昭和一六年一二月
 昭和一九年九月
 昭和三五年八月
 昭和三七三年三月
 昭和五〇年四月
 昭和五二年三月
 昭和五六年三月

〔論文〕

昭和五一年四月
 昭和五一年一〇月
 昭和五二年三月
 昭和五二年三月
 昭和五二年一〇月
 昭和五三年三月
 昭和五三年六月
 昭和五三年一二月
 昭和五四年三月
 昭和五四年五月、六月
 昭和五四年七月
 昭和五五年一〇月
 昭和五五年一二月

抗日政權の東亜新秩序批判（東亜研究所）
 支那智識階級の民族主義思想（上）（東亜研究所）
 近代支那における宗教結社の研究（東亜研究所）
 中国善書の研究（弘文堂）
 ストットヒル中国の歴史（注釈・共著）（研究社）
 中国・朝鮮の史籍における日本史料集成（明実録1・2）（国書刊行会）
 道教の総合的研究（編）（国書刊行会）
 An Investigation into the Actual Condition of the Hui Kuans of the Chinese in Singapore and Malaysia.（文部省）

Cultural Difference between China and Japan, "Occasional Paper Series" no. 32, Nanyang University
 明末における新興の民衆信仰集団について（『東方宗教』四八）
 道教とは何か——道教・道家・道術・道士——（『道教の総合的研究』所収）
 明末・清初の社会における大衆的読書人と善書・清言（『道教の総合的研究』所収）
 明末の新文化と読書人層（『宗教社会史研究』雄山閣）
 清末の青帮とその変貌（『立正史学』四二）
 嗣漢天師符を訪ねて（『桜梅』一）
 タオの原義を探る。（『遊』一〇〇四）
 平田篤胤と中国の学問（『立正史学』四五）
 李栗谷と郷約（『韓』八一五・六）
 中国文化史上よりみた江淮以南の地域史的研究（序説）（『立正大学文学部論叢』六四）
 中国史上の民衆と客家（『アジア文化』五）
 中国江南史上の道教信仰——特に土地神信仰をめぐる文化の地域性——（『仏教史学会三〇周年記念『仏教の歴史と文化』』）

昭和五十六年 三月

昭和五十六年 三月

昭和五十六年 三月

昭和五十六年 九月
昭和五十七年 二月

Formation of Chinese Communities and Hui Kuans and their Leadership. "An Investigation into the Actual Condition of the Hui Kuans of the Chinese in Singapore and Malaysia"
Ta-Po-Kung and the Local God of the Soil. "An Investigation into the Actual Condition of the Hui Kuans of the Chinese in Singapore and Malaysia"
Some Aspects of Chinese Religions Practices and Customs in Singapore and Malaysia. "Journal of Southeast Asian Studies" Vol. XXII No 1.
韓国新儒教と中韓日三国の文化交流(『韓国文化』三一九)
Yi Yul-Goka and the Community Compact. "Studies on Korean Neo-Confucianism" Columbia Univ, Pres.

論考数は八〇余篇にのぼるが、ここでは立正大学に着任された昭和五十一年以降にかぎり、書評等も割愛した。